

岩手大学図書館旧宮崎文庫所蔵 『十和田山本地由来記』の翻刻(二)

家 井 美千子

本稿では、先に報告した岩手大学人文社会科学部紀要『アルテス・リベラレス』一〇〇号に引き続き、かつて「宮崎文庫」に所蔵されていた岩手大学図書館所蔵の和書『十和田山本地由来記』の後半部分(下巻)を翻字したものを示し、合せて前稿の翻刻作業を一部修正するとともに、『十和田山本地由来記』本文の特徴を概観し今後の研究の展望を示す。

1. 翻刻

はじめに、旧宮崎文庫所蔵『十和田山本地由来記』下巻(第四十―五丁裏から裏表紙まで)を行う。

翻刻に際しての留意事項は(一)と同様、以下の通りである。

(一オ)は第二丁表を、(一ウ)は第一丁裏をそれぞれ示す
判読不能の文字は「？」と示す

判読に疑問がある文字には、右に*を付す 例…○*
助詞や送り仮名として右に小字で記されていたものはポイントを

下げて示す

もとの字を消した痕跡がある場合には、棒線「―」などで示す
傍線は原文に付されていた場合に、そのまま傍線を伏して示した
原文の一行が翻刻本文一行に収まらない場合は次行につづけて示
し、行終りを「/」で示した

(四十四ウ)

十和田山本地 下巻

穀城山麓^{こくぎょうさんろく}に黄龍^{わうりゅう}を求たる昔^{むかし}のためし引替^{ひきか}て法花^{ほっけ}経開^{けい}き
寶珠^{ほうしゆ}の光^{あかり}八苦^{はつく}やうらくの雲^{くも}も晴^{はれ}て唯一^{いち}神心^{しんしん}外無^{ぐわいむ}別^{べつ}之^の理^り

法^{ほっけ}のおしへの道直^{みちなお}に心も清^{きよ}き南蔵^{なんざう}坊宿^{ぼうじやく}々^々村^{むら}々^々打過^{うちか}てこけ畑^{はたけ}

村^{むら}に一夜^{いちや}の宿^{しゆく}をかれ給^{たま}ふ亭主^{ていしゆ}御僧^{ごそう}ハ何国^{なんこく}へ御通^{ごつう}りまします

愚僧^{ぐそう}ハ是^{こゝ}より西^{にし}に向^{むか}て言分^{げんぶん}山^{さん}に參^{まゐ}ル也亭主^{ていしゆ}聞^きておろか也御僧^{ごそう}是^{こゝ}分^{ぶん}

西^{にし}にハ八ノ太郎^{はつたろう}と申^{まを}者山^{さん}々^々谷^や々^々やきひろけかいまんくと瀉^{かた}をなし

(四十五オ)

四五年^{しごねん}の前^{まへ}迄^{いた}ハ木^きヲとり山^{さん}焼^や綴^{づい}はぐ人もかよひしがおそろしや

大木^{おほき}小木^{こぎ}打^うたおれ人の通^{つう}路^ろあらばこそ思^{おも}ひとどまり給^{たま}ひやと申^{まを}に而^{しか}

それこそ望^{のぞ}所^{とも}也と明^あれは?而^{しか}立^た出て急^{いそ}せ給^{たま}ひばおとで聞^き月^{つき}日^ひ時^{とき}に

着^き給^{たま}ふあらおもしろの景^{けい}山^{さん}やとしばしやすらひ一首^{いっしゆ}の詩^しをそ吟^{ぎん}ジ

給^{たま}ふ空山^{くうさん}不見^{みえ}人^{ひと}レ但^た人^{ひと}言^{こと}響^{ひび}ヲ返^{かへ}景^{けい}人^{ひと}深^{ふか}一^{いち}林^{りん}レ復^{かへ}照^{てう}青^{せい}苔^{たい}

土^{つち}誠^{まこと}古^{ふる}人^{ひと}之^の心^{こころ}思^{おも}入^いしはし詠^{えい}めておわすますか、る所に白^{しろ}雲^{うん}一村^{いちむら}

たな/

びぎ孔雀^{くわんこく}まひ下^{くだ}り大石^{おおいし}乃^の上に足^{あし}をと、めすわいし短^{たん}冊^{さつ}そつと置^おこ

くう/

(四十五ウ)

にあかりうせにける南蔵^{なんざう}坊^{ぼう}こはふしきなりと右^{みぎ}之^の短^{たん}冊^{さつ}取^と上^う見^み給^{たま}ひば

善哉(一) 難行苦行苔の行功を積りて大願既に成就せりみろくの出世の明月には必正覚疑ひなし夫迄は衆生さいと人非人等三至迄現世のねかいみてせんや猶々行末守らん南蔵坊おしいたゞき天二向て九拜し右手をはるかに詠れば月山御? れいくたり心しつかに礼拝有(一)

月日峠とつげられしも実に理と見得に覺是(一) 末ハ道なふして如何せんと立わづらいてぞおはしますか、る所に西分はるか弘法そうと

(四十六オ)

さへつる声しきり也有難や神慮に叶ひ是をしるべに急る、大に

山木乗越飛越見あくればばんじんのへきがなかとそ見得て岩もる水にのをうるおし足をつま立木根に取付見おろしせハ谷深

そこしれず嶺よ谷よと打越て見れば一つの瀉有り南蔵坊立寄

見給ふに越すに越されぬそこ深くしばしたゞすみおわしますか、る所に

? の波間(一) 今年ハ二八の花盛いとあてやかなる女房のこつまかいとり

あゆみくる南蔵坊へ立寄てのふ御僧様向の岸ハ御通かみつから御道引き

(四十六ウ)

申参せん南蔵坊聞召し仰の如く参候得ばみつからが肩に御取付候へ南蔵坊聞召し仰ニ随へ申さんと肩に取付給ひば陸地を歩がごとくに

安(一) くと向岸し着給ふ南蔵のふいかに女房か、るさびしき人倫絶たる山水に如何渡らせ候哉但しきじんか由緒を語候得と仰せけるあら

うれしや

な御尋なく共申度みつからが此水中に住む龍女ニ而候御僧八世のよ

には

糠部丸と申せし折のみつから妻ニ而候其時之名ハそらよと申せしもしつとのねんふかくしてあまたの女ねたみそしりてしんのの

(四十七オ)

ほのふ立登り我と我が身をもやつしつ、終に虵身のたひと成ねたむ女ヲ取ころし此水中に飛入すまゐをなす事七百歳我名ヲかた取

兵衛が池と申也かく因縁ふかきちきり置たる思ひの種万がうをふるとてもわする事はつゆノ間も思ひこがる、涙の雨晴る、間も無キ此

瀉

につき思ひを不便と思召下されたつの衣もぬきすて、ちぎりをこめて友にみろくの出世待申さん南蔵坊聞召し扱ハ左様か御身の、りに

した

がわんと思ひ共心にねんする願あればはかいの罪をうけん事思ひ

(四十七ウ)

もよらぬ去なから我大願成就叶ひなば召仕みろく出世ハは地道のくげんすくひ成佛得道を得させんと仰ける龍女こは有難し(一) さあらば

仰に随ひ参らせん是付壱つの難儀候也此向に言分山の主ハ之太郎ト申ハ頭八ツ其丈式十丈あらわれんと思ひを須弥にもたけをくらぶ

る

也かくれんとすればけしの中にも身を包日本一之悪龍之上十五日

果成

ぬれば此瀉にしのび来ておなめにせんとなふる也下十五日ニハあれ

御覽せよ

是今三里へたつてやつかうだが嶽のてうに壱つの池有此主

(四十八オ)

八頭の大蛇名をば八丹八ト申也元ハ奥瀬村の人なりけれども八ノ太郎に

おとらぬ大蛇是ハ下十五日になりぬれば此濁江参りつゝかれもおなめになれと

てうちやくす其くるしみやみやるせなく刻限間近くなりぬれば追付参らん御格悟あれと申けるかゝる所ニ白雲うつ巻其内分其丈七尺余

の大ノ男南蔵坊の御前に畏り某いか成者と思召上野村和田兵庫が家臣伊達小野右門と申者大しやく天のこかんを以て明神ト被成只

今

此池ニ御難義之由大しやく天のみつけにより加勢トして参上申ける

(四十八ウ)

南蔵間召し有難次第也小野右門殿之事明神?官大しやく天より蒙る

由承及只今の難儀ひとへに承頼上るといふや否八つかうだが嶽より黒雲出ると見へしがてんからいなつましやちくの雨をふらせいつさ

んに懸テ

くるかの池に飛入いだけ高にのびあがる有様ハ頭ハ八つ百連の鏡之様成拾六の眼くわつと見ひらひて天もひゞくる大音上ヶいかに南

蔵我

をばいか成ものと思ふらん元ハ奥瀬村のみんななるが子細有て八ツかう

だが嶽の主八丹八とハ我事也此池の龍女に心を懸て有けるなんじ

(四十九オ)

うばい取上無念や今に引さきすてんと火をんとつと吹出し飛か、らん

としたるける天満館明神是を見て推参成る小蛇め一文字に飛かゝるく

まんとすれば大蛇ハ角ニ而はねかへす明神さしつたりと首骨をし

つかとしめゑいやくとねち合共さらに勝負ハなかりける天満館明神

今ハ本體あらわし機尋の大蛇となり互にくいつくわれつ寔をせんと

戦けるに八丹八いたけ高にのひあがりやアこしやくがましき小蛇め今に思ひ

しらせん明神聞てからくと打わらいおのれとて清帳外のどうしんしやめ

(四十九ウ)

今に思ひ知らせんとたかいにあらそう其いきほいさしもの万水血し

ほになり波をこくう打上くた、かいしはすさまじかりける次第也八丹八?

口おしき南蔵龍女二人共引さかんと明神をふりはなし一さんに懸て行明神どつ

こへやらじと尾先をむんつとしめゑいやくと引給ふ龍女此由を見

るふもなんじ今迄我をてうちやくし其へんほうに今におもい知らせん

とぞんぶと入と見得しが八丹八かどう中にむんづと取付八丹八是を見るふ

もねがふ所の幸かな引さきすてんと飛迎南蔵此由御覽して権現

(五十オ)

より給わりし御杖をなげ給ひば八丹八がみけんにはつしと当ると見

得しがたちまち通力自在をうしないわなくふるつて血涙こぼる、時

に手ヲ合あら勿體なや神力佛力及はぬ事命を御助被下とまつたく

しやうけハ不申上御けんぞくと思召自然之時ハ御加勢申上るやらん
真平御免被下と涙と友に申ける南蔵聞召し善哉、命を気みろ
く出世のあかつきには必佛果を得させんと仰ける大地手ヲ合有難し
くく

と喜びけるさあらば御けんそくの印を見せ申さんとゆひを切て大石に

(五十ウ)

おし付八丹八が手形石とて惣兵衛川の上かみに今に有南蔵御覽してきと
くく

是合永く御契約けいやくましませば有難し、と本道に通力自在を得黒雲
に打乗り我住嶽ニ入ける明神南蔵坊御前にひざまつきあやうき難

の御通ながれまし、く、て大悦是に不過重なだ而御難の其せつ亦もや参申さん
と互に礼拜事おわれば白雲に打乗り天満館本社へこそ被下給ふ

南蔵坊龍女を近付つケ我ハ是合言分山に急也大願成就とさくならは
必参申べし龍女御別れをかなしみしばらく見返り奉り此龍女

(五十一オ)

南蔵坊大願成就ましませば明神の官をさつけ諸人願ひの印出

さんごの取次善悪を見合おくら山に住給ふ其時右之惣兵衛が池ノ
水絶たて渡りも安キ惣兵衛川是也南蔵坊夫なごもあまたの難所打

越て大瀧たに着給ふ見渡せばかいまん、とすまじき岸打波

ハ岩ほにせかも藍あゐをそむるとみへにける三拾丈の関門の瀧岩に
せかれておつる音山家にひゞき震動しんどうすそれ分けん山難水打過て
おまつ倉くらに着給ふこは不思議也権現より給りし金ノわらんじ

(五十一ウ)

きる、と見得しか蓮華れんげとなつて海に入ル南蔵坊こは有難し、我
住山すまはならんとはつしやくをとめて法華經ほけきやう誦じゆまします御聲みこへ

は山家に響ひびき五色の雲たなひき翳かげて神社こんしや權社けんしや守護しゆごしおハします
有難かりける次第也かゝる所に二八にたらぬ女房にようぼう近ちかくと立寄かう
べを

うなたれ御經みけいてうもん居たりける南蔵御覽みかんじてヤア山中に女人通ふ
所てなし汝ながきかしんが生胎しやうたいをあらわせ其時女性なめい涙なみだを流ながうらめしや
みつからがとおよがいかい姿大願成就ましますを待もふけて候得共

(五十二オ)

急難ききなん時に女性の身なれば御加勢も成かたかく度々御多かう有故に成
佛ぶつのくわを得るといへ共刃くろしのそつくろしこんにしみ渡り何とそ此くけんす
くひ

給ひと涙なみだたにくれておわします南蔵聞召し扱とハ不便びんべんの次第かぎ哉やあら
ば

成佛得させんと天に向て合掌かつしやう有大しやく天津深く祈誓きせいまし
し、く、て権現けんげん分給はりし御杖みづゑをふり上あ天津神地津神六根清淨はろ祓はら

たまき清メ給ふ阿字十方三世一切諸佛菩薩八萬諸しやう
經かいじ阿弥陀佛南無大乘妙法蓮華經と御杖みづゑヲ以もて

(五十二ウ)

みけんてうと打給ひば有難や、忽たちまち姿引替かて如意輪にぎ觀音くわんおんと
光ひかりをはなつてこくうに上らせ給ひける今のおまつ倉明神是也

又こつせんとあらわれ此瀉しやの主下十五日成ぬれば此沖おきをしやうじん
と

変へんじ通べし其時桑くわノ弓蓬よもぎ矢やにて射いさせ給ふしからば生胎しやうたい

あらわれべし其時被一念し水しやくと成らせ給へ神社權社御
加勢有べし随分神力願ひ給へまたもや参り申さんと光ひかりはなつて

こくうにあからせ給ひけるはるか跡あと分其たけ七尺余の大ノ男甲

(五十三オ)

胄をもよふし五尺三寸の大刀八人張の左手の脇に横たへて 畏謹而

参ハ如何なる者と思召四野崎八郎左衛門宗照にて?主に忠孝

義心

之二字大しやく天に通じけん自由 在有といへ共刃ばのくるしみ通のれす

此山に御神座之由御加勢申上度候刃のくるしみ御すくゐ給はれと申ける南蔵聞召扱ハ宗照にて有けるかさらば明神の官をさつけんと寶珠を頭にさ、げ天に向てがつけうあればたちまち姿引替大瀧明神ト現れ給ふぞ有難かりける次第也其時鑽石兜石として今に有

(五十三ウ)

かゝる所にさも美しきしやうじん波間を歩む有様ハ陸地をあゆむかことく

也南蔵御覽じてくわの弓にてよもきの矢をはなし給ひばあやまたすしやうしんじのみけんにはつしと立ばなくなりすておどると見得しが忽に

老丈斗りのやしやとなり鉄ちやうひつさけ向ふをはつたとにらみしいきほい

に大木に木倒れける天もひ、くる大音ニ而八大龍王御加勢有て給れ八太郎

沼の父黒龍何とておそくましますぞ池の堂の赤龍いそぎ参れ其外大沼小沼の大蛇小蛇我住山内裏にじやまんがまんが入来ル出よくと

(五十四オ)

呼わつたり此聲に随而大蛇小蛇黒雲に打のりくしやちくの雨ヲふらせ集

しハすぎまじかりける次第也八大龍王なんだ龍王召れ旗下の券賊共言分山之主八ノ太郎難義由加勢致し一々つかみひして参られよ心得たりと

あまたのけんぞく引連て黒雲に打乗り震動雷電稲光しやちく雨ヲ

ふらせつ、一さんに懸てくるすぎまじかりける次第也八ノ太郎あれ

く見給ひかた

きのやつばら陸に叩へたり中にもくきわ瘦坊主八太郎沼の黒龍大音

上ケ我子の山を妨んとす悪僧め微塵にせんとさげび水をかき立く

既に間近く寄せ来ル大瀧明神是を見て五尺三寸真向に目懸ゑひやつ

打かくる黒龍心得たりと角二而からりと請ければさし物大太刀鏢元

おれてのきにける大蛇ハ弥々いかりをなし火煙を吹かけ引さきすと

んと飛かゝる

明神事共せず首骨をしつかとしめこ、をせんと、ねち合ける明神威力

の徳により一ト振りふつてゑいやつと向ノ岩ほとなけつくればうんといふて

眼こくらみててお様ぞ成かりける池ノ堂の赤龍是ヲ見てしなしたり

今におもひ知らせんと一文字に飛かゝるおまつ倉の明神是を見給ひ

(五十五オ)

あまさじと大蛇の背中に飛乗り両の角銃?とメヤあ面白し馬頭観音馬に乗り如意輪観音汝に一段乗て見せん大蛇ハ弥々いかりをなし

ふりおとさんと働げ共何か及ばん神通力今に思ひ知らせんと胸中つかんで／

ゑいやつとなけ給ひば半死半生身ぶるひしてぞ逃て行く大蛇小蛇は見え／

それあますなど火を吹かけ／一度にどつと寄てくるかゝる処に劍吉明神／

加勢として三尺五寸の利劍を持海へざんぶと飛て入ル二神是に力を得三神／

一所に切てかゝる右手左手にあい付テ寔ヲせん、戦ける劍吉明神

(五十五ウ)

いつまで者をおもわせんと大の劍をてうと打ば大蛇が胸中真二つに切れ共頭／

は飛廻りしさてはらゐば指物大首はらりすんとうちおとし大蛇小蛇是／

見てそれあますなど一度にどつと飛かゝる三神通無変乃働に指物大蛇村々ばつと逃てゆくさもそうづさもあらんとしばしやすみ給ひける／

八之太郎是を見て大きに怒をなし今にひしいてみせんとおとり出とし／

たりけるなんと龍王は見えししまて我働を見られよとおとり出たる／

有様ハ身の毛もよたつ斗也天にひゞく大音ニ而ヤアいかに三人之者とも

(五十六オ)

我をば如何成ル者と曰ふらんなんだ龍王也今ひし出見せんと大風波打火ゑん／

吹立一文字に飛かゝる劍吉明神は見えしやあまさじ大ノ劍てうと打／

しつかとくわいくる／を岩ほへてうと打付ればみちんにくたげ玉ちるあられ／

氷をちらすことくも大瀧明神はつといふて鉄棒おつ取のべまいやつと拝み打に／

てうと打てバ火ゑんをとつと吹懸しが鉄棒忽湯成つてあめぼうまくるかことく／

なり小松倉明神はつとの給いむんすことくむ大瀧明神劍吉明神左右より取てしめんとしたりけるなんだ龍王は見えしから／と打笑内子もたつ／

(五十六ウ)

のやせ明神ばら幾方もそゝれ／と互に金剛力を出しゑいや金剛力とあら／

そゐしハ山家草木しんどうしあらなみこくうに巻上／戦ひしはすざまじ／

かりける次第也三神今ハ勢勞れ既に危く見得にける南蔵御覽じて寶珠を取て観念しなれた龍王かみけんに投給ひば忽眼くらみこわ叶じと跡おも見ずして逃て行鱗を切放されけんぞく共にいざなわれ龍宮海に逃て行く寶珠の威徳三神溜息ほつと継きしばらく

やすらゐおわします八ノ太郎是ヲ見てかいなきやつはるよ今に

(五十七オ)

ひしいてみせんとおとり出んとしたりかしばしまて南蔵ハおめて日本打破／

あをうなばらとなし我住まんと思ひしがかねて云合せし大六天魔王寔？／

頼んと天へひゞく大音上ヶ呼つたり魔王大将あじゆら王此由を聞か
も心得／
たりとあまたのけんそく引くして下界へ下る有様ハ震動雷電黒
雲稲妻大風古木吹たおし山家艸木しんどふしせつながら内に下りし
ハすさまじかりける次第也八ノ太郎に対面し心易くおもわれよ神社
権社のやつばらを一々取ひしぎざんじに魔国にせん事今の内

(五十七ウ)

しばらく休み居たける南蔵坊此由を御覽してあらおびた、しの次第やな
われ勢ニ而は叶ふまじさらば諸神祈り奉らんといらたかに数珠を
おしもて上ハ梵天大 爵下界の地ニ而ハ伊勢ハ神明天照皇太神宮
不じやうの鎮守ニは稻荷祇園加茂春日八幡ハ正八幡太神
けんす日ハ四社の太神まよきふね八五社の大明神中にも頼奉るハ
熊野三社大権現奥州ハ一百神兼而師弟にまします明星天
本地ハ虚空蔵大菩薩 靈現山十手仙門觀世音七崎村ニハ

(五十八オ)

正観音御誓願奉ル其外神社權社御加勢有て給れと一応？
不乱にいのらる、神社佛閣来順まし／＼て守護有こそ有難
けれしゆらの大将時分がよしさあうつ音者共と波打際に大音上ヶ
吾ハ六六天の魔王あしゆら王が弟かうくわつ鬼と云もの也三年以
前木曾の熊沢角範我がけんぞくかうまん鬼魂入替り日本をま
こくにせんと思ひしに其時汝等さままだけニ而がうまん鬼闇／＼とう
たれ／

(五十八ウ)

たり今に幸也八ノ太郎江一身して日本を打破ま国にせん大瀧
明神がうまん鬼がかたきなれば幸ひ六天のみやげ是みると榎丈斗

の大石をゑいやつとなけつくれは大瀧明神心得たりとしと請留此
返す請取れとゑいやつとなげ返しかうくわつ鬼ちうにひらりとかい
つかみ／
かしこへどうとすてやあなまぬるしけんぞく共懸よ／＼と下知すれ
ば数万？／
げしやう心得たりとじやまんのさかほこふり立／＼切てけるいきほ
いすさまじ／
かりける次第也三神心得たりと秘術のじゆつをあらわして八方立割
横手切り十王むくうに對て迫ればさしもにたけしやうのけんそく

(五十九オ)

皆々ぱつと引にける其中に其丈壹丈余りの大の男悪鬼す、み出
大音上ヶ名乗り我ハ六天にかくれなき角力の名人風来外道とハ
我事也日本の明神ばら一番所望と呼つたり劔吉明神から／＼打
笑ひ元来相撲ハ好也それこそ所望也互にさそくをふみ大手をひろ
けてむんつとくむゑんや／＼とねちおふたり外道は取手ハ何に／
ぞ／

やみの夜の一口ころばし骨筋ぬいてちらぶなげよつかいしき取
むしきそうふを始としてむりやうむくうに手を取たりける劔吉明神
とし／

とらせ給ふ御手はどれ／＼そしゆみせんおどしのみぢんなげ大瀧お
とし／

坂おとし雲に懸？はし大渡しあけ巻つかんでどうびねりゑいや／
と互にあらそふ勢ひ山家もくづれてしんどうすしやうノ大明

八ノ太郎関城に脇ヲ懸置はが？みをなしゑいかいなやつばら頭を
むねに／

当て右手の角を脇腹へ差こんでかひなをは？うくとはかみをなし
て／
せめたつる大瀧明神小松倉明神利劔を引さげ大音上やあ
下タ手に付て右手の肩を指込右足を強くふみ腕をからんで

(六十才)

はねかへせとたかにせり懸あらそいしはいさぎ能とて見得にける
明神／

下タ手に付てくるりくくと付迎る外道かさにか、つておしひしがん
と金剛／

力を出しける明神透を伺ひ波を蹴立て内上よりを引かけてゑいやつ
とうち付すかさず首をねぢ切につこと笑ふて立たりける南蔵坊

両神扱も取たり御拵くくと御喜ハ限りなし此時合も劔吉諏訪二而
盛りの花角力外道八ノ太郎是ヲ見てゑ、無念やなそれあますな

けんぞく共心得たりと数万ノけんそく大盤石を投懸く寄てくる

(六十才)

三神既にあやうく見得にけるか、る所にしきの鎧に劔ひつさげ大勢
中に割て入真向に額筋ぬき胴切足にさく懸ふみころし三神是

に力を得て八方立割横手切十王むくうに働けば時も移きぬ其
隙に七神の御手にか、り百八拾人壺つ枕に切ふせたり残りし奴原半

死半生村雲に打乗て行方知れずにうせにける外道 ぐわつ鬼是を
見テ／

ゑい口おしやと壺丈五尺両刃の銚をひつさけて天台火の雨ふらせ
大地

も崩る、大音にてゑひ口ほしや外道の敵南蔵め今にひしいて

(六十一才)
魔国にせんとしんどうらいでん火ゑんヲ吹懸く一さんに懸てくる

三／

神是ヲ見給ひあまさじものをとつてか、る外道こと共せず左右に
はらりとおみのけ南蔵坊を目懸討てか、るあやうかりける次第也か
うもく天／

御覽じて推参なるげどくめとむねぬにはつしとけ給ひばゆらくと
なる所を三／

神はせ合て三方切かくれば外道ハおとりあかり逃んとす西ノ方合
天照

太神 鎚矢ひつつかい待かけ給ふ南へ逃んとしたりしが春日大明神
利劔ヲふつて待かけ給今ハ通力自在を失ひ彼所にとつとき

(六十一才)

？びける三神立寄てずたくくに切ちらし時にかうもく天聲を上ケ如
何に／

南蔵坊大六天の魔王八ノ太郎に組し汝か身の上あやうき事大爵天
のみつきの為ト須彌の四天加勢としてあま下るはやく八ノ太郎追拂

ひ力を添て得させんとしばしやすらひおはします南蔵坊こハ有難し
く

八ノ太郎ゑひ々無念也口ほしや日本ハおゐての事大唐迄も取ひしかん
天もひ、くる大音ニ而いかに南蔵法も壺丈魔も壺丈今に思ひしらせん

といたげ高にのびあがりかけ出んとする所を大瀧明神八人張に

(六十二才)

大のかるまたひつつかいゑいやつと切てはなせばしんどうらいでん
のことく鳴

渡りあやます八ノ太郎かみけんにはぶくらせめてはつしとあたるト

見得しか／

もの／＼しやとかなくりすて波間にざんぶと入るとみへしか忽忒十丈斗の大蛇／

と成り眼八百れん鏡如く角ハ深山の古木に似ていかれる聲ハ天ハひゞく／

てらびそらてん地ハこんりんならくの底迄もひゞくべし震動雷電しや／

ちくの雨をふらせほのふを吹かけ／南蔵坊を目懸一さんに懸て来るす／

ざまじかるける次第也小松倉明神利劍を以てうとうてハリけんハ

(六十二ウ)

ちんにくたけける八幡太神宮劍はつといふて鐮矢つかいはなし給

ひば／

あやまたずまた、中にはつしと立？こゝ共せずかいかなくり猶もいかれば？／

？？るも既にあやうく見得にける南蔵坊今ハかうよと一念のすいしやく／

となさしめ給ひと法華經ひつかむり波間に入ると見へしが忽に忒十五丈の大蛇と成法華經の文字の数巻口上成りむんづと取組

て火煙を吹懸く互にあらそふ其聲ハ四方山鳴渡り谷ひ、き大山崩れて海へ入岩石われて火ゑんか出るしんどうたいでんしやちくの

(六十三オ)

雨をふらせつ、夜日三日の戦ひはすぎまじかりける次第也八ノ太郎そ／

ごろこざらくひさかれ流る血にてさしもの万水赫に染む玉ちる水珊瑚珠の玉をちらしがごとく也八ノ太郎いだけ高にのびあがりゑい

無念なり／

吾住山をうばわんとす今に思ひ知らせんも既にあやうく見得にけり熊野権現かむら矢取て打つがひはなし給ひばあやまたづみけんにはつ／

しと立神社佛閣それ／あますなど白羽の矢八方分はなし給ひ五胎に立ツ事みの毛の如しいたてなれ共事ともせず紅の舌を巻

(六十三ウ)

戦ひける須弥の四天御覽しておのれ今に思ひ知らせんと四方ヲどう／と蹴させ給ひば八ノ太郎ゑい口おしや神力多勢及ばん事

重而本望達せんと取てかへして逆て行三神是を御覽して何国迄もと跡をしとふて追かくる八ノ太郎百丈斗の岩石をなんと

里越へ黒雲に打て行方しれずに逃て行く岩ほハちしほに染変今の茜ヶ崎是也かくて南蔵坊水の表に浮み出諸神諸佛へ三拝

九拝ましませば諸神諸佛善哉／と皆々本所へ帰陣有社

(六十四オ)

有難かりける次第也是ハ扱置大瀧明神小松倉明神劍吉明神三神御招きまし／てさあらば瀉を清めんと大瀧関門を打開き

切てはなして清め給ひば重て清水まん／と然は内裏を建立せん水中に四拾九院の佛閣を建て宮殿くうかく鮮にきん／瑠璃？／

柱をみがきたてこうやうらんけいみかき立しやこうの？？瑠璃の石しつほうしやうごんのきぎはし玉の天蓋錦の旗こくうむうの？

なびくみきわの池にはぐせいの船にあやの帆を上ケにしきの綱し？

(六十四ウ)

らくかしやうの風吹ハ春の花被？儒道に開き生々菩提の氣ヲ

し、んしんきやうの穂の月ハ水中にうつる事げに衆生の 氣を
あらわす諸神諸佛来光まします誠にしやつかうの浄土？

言葉もおよばれすそれより十和田山大権現トあらわれ給ふそ
有難かりける次第也 劔吉明神ふかく契約まし〜て御帰陣有社
目出度けれ小松倉明神本地ハ如意輪觀世音明神とあらわれ給ふ
大瀧明神御鎮座まし〜て権現みろくの出世待こそ久かたの

（六十五オ）

現世の願ひみでせんと一度に参詣の衆生富貴圓満子孫繁

昌〜火難水難病難守り得させて長命安楽〜の願ひを達せん
未來ハ三惡道救上テ成佛得達得せん事何疑ひ有べきと御せい
くわん有こそ有難ける次第也 五郎左衛門此由を聞クも八力ヲ召さ

れ十和田

山に南蔵坊御神座の由有難し〜是ニ付諸人参詣なふかるべし我？

夫婦も参べし汝千人之夫を雇ひ嶮山大木引退人馬通用有
様に普請奉行致べし普請ノ成就其ハ上熊野權現之御堂建

（六十五ウ）

尤鳥居の高サ壹丈五尺小松倉明神大瀧明神建立可致

とそれハ鍛冶番匠数万人の人数御宮建立普請事ゆへなく成就致
永福寺法印御喜ひハ限りなし五郎左衛門夫婦もつれなひ〜御参詣

まし〜御堂の供養道踏初め給ハ祈禱あれバそれハも老若男

貴賤群衆袖をつらねて参詣有社ゆ、しけれ天下泰平国土
安全納ル御代社目出度ケレ

（後見返し）

天明五乙巳歲二月吉日

小原氏書之

（後表紙）

明治十歲二月吉日改

小原甚作主

《翻刻終了》

2. 前稿の修正について

前稿での作業後、既に翻字したものに修正の必要があることが判
明したものを以下に記す。

修正箇所 修正前 ↓ 修正後

（一オ） 3行目 藤原 ↓ 承平

（四十三ウ） 4行目 / 5行目 こくらむりやう ↓ こくうむり

やう

なお、右に示したもののほかにも修正が必要となるかもしれない
が、これらの翻刻の誤りは、作業者の能力不足や不注意によると
もに、筆写本文の特徴にも拠っている。当該の字形をたとえば
「ら」と「う」のどちらで読むべきか迷うことが多く、このような
場合はテキストの文脈で判断することが多いのだが、この写本では
それが難しかった。これについては、次の「概観」で説明する。

3. 旧宮崎文庫所蔵『十和田山本地由来記』の概観

岩手大学図書館所蔵『十和田山本地由来記』の書誌的な情報は以下の通りである。

装丁…写本 一冊(仮綴じ) 縦二六・〇cm 横一四・二cm
表紙…原装か 白地に型押しでマス目、マス目中にランダムに

○×等墨で書き入れられている

外題…十和田山由来記(左側直書き)

内題…十和田山本地由来記 オ一卷(一オ)

十和田山本地 下巻(四十四ウ)

料紙…楮紙 丁数…六十六 墨付…六十六

字高…二五cm

本文…漢字・平仮名混じり 振仮名(平がな/カタカナとも)

あり

行数…一面七行

その他…本文・振仮名等は基本的に墨書であるが、時に鉛筆での書き入れと見られるものが行間にある。

後表紙見返しに「天明五乙巳歳二月吉日/小原氏書之」、

後表紙に「明治十歳二月吉日改/小原甚作主」とある。

第一丁表の右上方に「宮崎文庫」の蔵書印があるが、宮崎文庫に収められた事情はまったく不明。

本稿において当該写本を『十和田山本地由来記』としたのは、外題と二つの内題がすべて異なっているため、双方をあわせてかたちの第一丁表の内題を優先したことによる。

岩手大学図書館所蔵『十和田山本地由来記』は、成田守氏『奥浄瑠璃の研究』(一九八五)や、阪口弘之氏ほかの『奥浄瑠璃集 翻

刻と解題』(一九九四)で、『十和田山由来記』として翻刻・解題されているものとはほぼ同じ内容である。

右の『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』では、この物語の代表的なテキストとして、岩手県立図書館所蔵の『十和田山本地』が翻刻されており、解題(林久美子氏担当)には、その諸本がきわめて多いことが指摘されている。『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』が指摘している『十和田山本地』の三系統は以下のような特徴を持つ。

第一類…南祖(南蔵・南宗など)の幼名を熊之進、父の名を戸渡五郎左衛門とし、南祖出家の原因となる御豊との婚姻譚をもち、八之太郎、八丹八(郎)との合戦譚をもつもの。

第二類…南祖の幼名を善正(善心)、父の名を善字(善覚)とし、御豊との婚姻譚は欠いて、南祖の出家の原因を早逝した母の善提を弔うためとするもので、八之太郎(八郎)との合戦譚も第一類に比べると簡略。

第三類…関白は実の孫である南祖がお豊と祝言とかわすものの、その美男ぶりから次々と女に恋慕される恋愛談となっているもの。

今回翻刻した『十和田山由来記』は第一類に含まれ、物語の展開は『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』で翻刻されている岩手県立図書館本や、慶応義塾大学図書館所蔵『十和田山本地』などとはほぼ同様であるといえる。

これら多くの諸本の特徴について、そもそもこうした「奥浄瑠璃台本」を盲目の芸能者の「台本」を考えることに疑問を呈し、なぜ筆写されたのかについては、前掲書の林久美子氏の解題に既に触れられており、「奥浄瑠璃台本」と呼ばれているものは「語りを前提とする草子」(傍点ママ)だと指摘されている。

ところで、『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』の翻刻本文や慶応義塾大学図書館蔵本の翻刻本文などと、旧宮崎文庫蔵『十和田山本地由来

記』の本文を比べてみると、物語内容や展開はほとんど同じであるとはいえ、物語表現が大きく異なっていることが明らかである。

その一例として、宮崎文庫旧蔵本の本文の下巻、六十一丁裏四行目から六十二丁表にかけての文章を、句読点やカギ括弧を付して私に本文を整えたものを①として以下に掲げ、『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』に翻刻されている岩手県立図書館本の該当本文②と比べてみる。

①旧宮崎文庫蔵本(整定本文)

南蔵坊「こハ有難し〜」。

八ノ太郎「ゑひ々無念也、口ほしや。日本ハおゐての事、大唐迄も取ひしかん」天もひ、くる大音二而「いかに南蔵、法も忝丈、魔も忝丈。今に思ひしらせん」といたげ高にのびあがりかけ出んとする所を、大瀧明神八人張に大のかるまたひつつがい、「ゑいやつ」と切てはなせば、しんどうらいでんのことく鳴渡り、あやまたす八ノ太郎かみけんには、はぶくらせめてはつしとあたるト見得しか、「ものくしや」とかなくりすて、波間にざんぶと入るとみへしか、忽式十丈斗の大蛇と成り、眼ハ百れん鏡如く、角ハ深山の古木に似て、いかれる聲ハ、天ハひゞくてらび、そらてん地ハこんりんならくの底迄もひゞくべし。

震動雷電しやちくの雨をふらせ、ほのふを吹かけ〜、南蔵坊を目懸、一さんに懸て来る。すぎまじかるける次第也。

②岩手県立図書館本(『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』による翻刻本文)

南蔵坊、此よし承り、こハ難有〜と、三度札拜仕り、扱亦八之太郎ハ此のよしを聞悟り、ゑい〜口惜き無念なり、我か心掛るハ、日本ハ扱置、大唐までも取りひしかんと思ひしに、じやまものとも入来り、悪きやつばらと、天地にひ、けと怒りける、いかに南

蔵坊、法も忝丈も忝丈といふ、今に思ひ知せんと言ひける、兎にも角にも八之太郎か働らき、おそろしきとも中〜に申斗りハなかりける

十四之巻終り

十五之巻始り

扱も八之太郎申よふ、如何に南蔵坊主、我か出宗のならひ念仏申せ、只今に思ひ知らせんと、頭高く延上り、既に飛掛んとする処を、大瀧明神是を御覧じ、おのれあまさじと、八人張の大弓、二十一束のかりまた引つかひ、暫したもつてゑいやつとはなち、矢しんどふらいでんのことく鳴渡り行程に、八之太郎ハみけんへ羽震ひして、はつしと立ハ、身の毛もよ立はかりなり、されとも八之太郎、少しも事ともせず、もの、しやとかなぐりすて、波間にざんぶと入と見えしか、忽ち二十丈はかりの大蛇となり、八ツ頭の、眼ハ百れんの鏡のことく、十六の角ハ深山の枯木のこどくなり、天地にひゞく大音ハ、天地、こんりんならくの底までもひゞくべしと、しんとふらいてん、稲妻の光り、しやぢくの雨をふらせつ、夜日三日三夜か其間、陣場を引ず戦ひけるハ、おそろしかりける次第なり

①を、翻刻原文のままではなく整定したのは、そのままではあまりに読み難く理解し難いと考えたからである。②の本文は句点などがある『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』の翻刻をそのまま掲げているが、①に比べれば読者にとっては読むことにより容易である。換言すれば①は文章を読む者への配慮が足りないといえる。

本文の表現にも同様の傾向があり、たとえば登場人物の発話にあたって、②では人物の発話の後に「と、〜札拜仕り」「と怒りける」「と言ひける」などの発話であることを示す表現があるが、①では発話の前に「南蔵坊」や「八ノ太郎」などの人物指定は示すものの、それを受ける表現がなく、発話だけで文を切っている。これ

は、全体の文章量が少なくなっている要因のひとつでもある。

このため、それぞれの発話がどこまで続いているのかの見極めが難しく、さらに発話と地の文との区別を読み取り難いため、文脈の把握も困難となつて判別し難く翻字の推測が困難となることが多かった。

こうした傾向は引用した箇所だけに留まらず、全体を通して見られる特徴である。

つまり、「読み物」としての特徴が強い②に比べて、①は実際の語り現場での発声をそのままメモしたものであるかのように見える。これが、旧宮崎文庫本に限った傾向であるのか否か、今後、未見のテキストを調査しそれぞれの特徴を把握する必要がある。また、①と②のテキスト成立時期の違いも原因かもしれない。

後表紙見返しおよび後表紙に書き付けられた記述によれば、旧宮崎文庫ははじめ天明五年（1825）に筆記されており、さらに明治十年に「改」とあつて天明の写本に手を加えたものと考えられる。ともに「小原氏」とあり、同じ一族かと推測されるが、誰であるのかは未調査である。また、明治十年に「改」めた範囲がどれほどかは、字形や墨の濃さなどでは判別できなかった。このため墨で記されているものはすべて翻字している。今回は翻刻に加えなかつたが、鉛筆書きの振仮名などもあつて、これがいつのものかについても調査できていない。

時期について検討すると、初めて筆記されたと考えられる天明五年は、岩手県立図書館本の安政二年より七十年ほど前である。『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』の解題に列記されている諸本で、年代が記録されているものは天保年間か明治以降のものであり、旧宮崎文庫本は現在調査されているものの中で最も古い写本とすることができよう。

天明年間には、幕府の巡見使一行に同行した古川古松軒が『東遊

雑記』に十和田湖の伝説を記してもいるし、菅江真澄もまた盛岡から北に向かった旅の記録「岩手の山」に十和田の伝説を記している。このことから、少なくともこの時期までにはある程度まとまつた「十和田山」伝説が成立していたと判断できる。

古川古松軒は書き留めた土地の伝説に南蔵坊らしき人物の情報を記していないが、菅江真澄は『三國伝記』を引用しつつ、「南層」という僧の伝説を記している。また菅江真澄はさらに後年鹿角側から十和田湖に至り、「十曲湖」^{しわだのうみ}に詳しく当地の言い伝えと思われるものを記しているが、真澄の書き記したそれらの伝説は「十和田山本地」諸本の第一系統の内容と一致する所もあり、また異なる所もある。

「十和田山本地」の研究のためには、同一系統の他の諸本とのさらなる比較研究が必要であるが、これらの外部からの来訪者の記録との比較研究もあわせて、十和田湖伝説の成長と、語りの現場とその内容を書き記す行為がどのように関わっていたのかを今後明らかにしたい。

裏表紙に「改」とある明治十年ごろは、他の複数の写本が筆記された時期に近く、また筆記年次が明らかでないその他の写本には、インク書きのものや、活版印刷の跡が見える用紙に筆記されているものがやはり複数発見できることなどから、明治十年前後に、いわゆる「奥浄瑠璃台本」を筆記して残そうという傾向が「語り」の地元にあつたのだと推測される。なお、諸本に現れる地名の違いについて、それが「語り」の現場の影響をある程度受けているものと推測しているが、これも今後の調査で検討して行きたい。

こうした「奥浄瑠璃台本」筆記の活動が、大槻如電・文彦兄弟の奥浄瑠璃収集の活動とどのように関わるかについても、今後の課題である。

参考文献

- 『奥浄瑠璃の研究』成田守 一九八五 桜楓社
『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』阪口弘之編 一九九四 和泉書院
「慶応義塾大学図書館蔵『十和田山本地』翻刻・解題（一）」（大東文化大学
日本文学研究四二 二二〇三）